

仏説阿彌陀經

④



満井秀城
本願寺派司教

因果段—往生する者の因果

「俱会一処（ともに一処に会する）」。今号で拝読する『阿彌陀經』のご文に説かれる、お浄土が先立つた親しい人、愛しい人と再び会うことができる世界であることを示された言葉です。はたして、「俱会一処」のお浄土とはどんな世界なのでしょう。また今回のご文には、このお浄土へ往生するための因となる行についての説示があります。満井先生はこの箇所を「阿彌陀經」最大の難所」といわれています。一体どんな「難所」が待ちかまえているのでしょうか。

【註釈版本文】 ▼一二三頁

【五】 また舍利弗、極樂国土には、衆生生ずるものはみなこれ阿鞞跋致なり。そのなかに多く一生補処の菩薩あり。その数はなほだ多し。これ算数のよくこれを知るところにあらず。ただ無量無辺阿僧祇劫をもつて説くべし。舍利弗、衆生聞かんもの、まさに発願してかの国に生ぜんと願ふべし。ゆゑはいかん。かくのごときの諸上善人とともに一処に会することを得ればなり。舍利弗、少善根福德の因縁をもつて

【現代語訳】 ▼浄土三部經（現代語版）一二三頁

【五】 また舍利弗よ、極樂世界に生れる人々はみな不退転の位に至る。その中には一生補処という最上の位の菩薩たちもたくさんいる。その数は実に多く、とても数え尽すことができない。それを説くには限りない時をかけなければならない。舍利弗よ、このようなありさまを聞いたなら、ぜひともその国に生れたいと願うがよい。そのわけは、これらのすぐれた聖者たちと、ともに同じところに集うことができるからである。しかしながら舍利弗よ、わずかな功徳を積むだけでは、とてもその

かの国に生ずることを得べからず。

国に生れることはできない。

■往生人の果徳—釈尊の尊い配慮

この一段では、浄土に往生する者は、不退の位に住し、一生補処の菩薩となることが示されています。

前段の名義段では、主仏である阿彌陀仏と、眷属の菩薩の功徳が説かれ、これに続いて今の一段となりますので、この部分を眷属の菩薩の功徳の続きと見ることも可能ですが、前段の最後が、「舍利弗、かの仏国土には、かくのごときの功徳莊嚴を成就せり」とあり、「功徳成就」を結んだ形になっていますから、「眷属の菩薩の功徳」は前段でいったん完結し、この部分は浄土の往生人の果徳と見たらどうかと考えており、今回の一段を「因果段」というのも、その意味においてです。

浄土に往生した者は一生補処の菩薩となるという果徳が示されます。そして私たちは、その果徳を知ることによって、浄土を願う心が生じます。だから、「衆生聞かんもの、まさに発願してかの国に生ぜんと願ふべし」と説かれているのです。

私たちは、結果で示されて、初めてその意義がわかります。車の運転免許証の更新時には、視力検査などとともに、講習の

時間があり、そこでは悲しい事故現場の写真やビデオが映されます。免許証を持つている人なら、安全運転でなければならぬことは既にわかっているはずですが、このような写真やビデオを見なければ、安全運転が、どこか他人事になってしまうのです。

「依報段」で浄土の風光が具体的に説かれているのも、この「因果段」で浄土に往生した者は一生補処の菩薩になることが説かれているのも、私たちに浄土を願う心を起させるための、釈尊の尊いご配慮なのです。

「一生補処」とは、「一生の後に仏処を補する」という意味で、次の世には仏になる菩薩の最高位をあらわします。浄土真宗では、「往生即成仏」として、浄土に往生したら直ちに仏になると聞いておられると思います。そうすると、いま、浄土の往生人が一生補処の菩薩になるというのは、少しおかしいと思われるかも知れません。まさにそこが親鸞聖人がご苦労なされたところなのです。

いまの『阿彌陀經』でもそうであったように、「浄土三部經」においても、七祖の聖教においても、正定聚不退の菩

薩は、浄土に往生してから獲る位と説かれています。そのため親鸞聖人以前の浄土教では、彼土（浄土）での正定聚とされてきました。しかし、私たち衆生の側に仏因となるものは何一つ持ち合せてなく、だからこそ阿弥陀如来は、本願独用の法義を用意してくださったはずです。それなら、浄土に往生して、ここで菩薩の修行をしてから仏になるという、私たち衆生の仕事があるのはおかしいではないかということになります。本願独用であるなら、「往生即成仏」、これを現世の側で言えば「現生正定聚」でなければならぬはず。論理上はそうでも、そ



阿彌陀經が説かれた祇園精舎の遺跡

れを裏付ける聖教の文がないと、義として成立しません。聖教に根拠を持つことが鉄則です。

親鸞聖人は、そこで極めて学問的な方法を探られました。漢訳『大経』には、普段私たちが用いる魏訳だけでなく、いくつもの異訳が存在します。『教行信証』を見ますと、宗祖が、さまざまな異訳をご覧になっていることがわかります。その異訳大経のなか、唐の時代に訳された『如来会』の第十一願成就文には、「正定聚」について、次のように記されています。

かの国の衆生、もしまさに生れんもの、みなことごとくく無上菩提を究竟し、涅槃の処に到らしめん（三〇八頁）とあります。「かの国の衆生」とは、浄土の往生人のことで、これは浄土の正定聚を指しますが、それと並んで、「もしまさに生れんもの」とあるのです。「まさに生れんもの」とは、未来に浄土に往生する者のことで、つまり現時点では、この世にいる者ということ。そこに正定聚が示されているのであって、「現生正定聚」の根拠となる文が、ここにあったのです。

これで、確かな聖教の根拠が見つかりました。あとは、それならどうして、多くの聖教は、浄土での正定聚を示しているのかを説明せねばなりません。これについては、浄土に往生して往生即成仏のさとりをひらいた者は、どのような姿を取るのも

自在であり（これを広門示現の相と称しています）、阿弥陀如来の慈悲によってさとりをひらいた者が、迷える私たちのために阿弥陀如来の慈悲をよるご菩薩の身を示しているという意味になります。このため「一生補処」と説かれています。

『阿弥陀経』では、さらに、この一生補処の菩薩たちと、「ともに一処に会する」とも説かれています。有名な「俱会一処」の文です。先立つた愛しい人と、また会うことのできる世界、それが浄土です。そう思うことで、浄土を願う心が起ります。して来た行いが違えば、行き先も違って当然。これが因果の

舍利弗、もし善男子・善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞き、名号を執持すること、もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日、一心にして乱れざれば、その人、命終の時に臨みて、阿弥陀仏、もろもろの聖衆と現じてその前にまします。この人終らん時、心顛倒せずして、すなはち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得。舍利弗、われこの利を見るがゆゑに、この言を説く。もし衆生ありて、この説を聞かんものは、まさに発願してかの国土に生るべし。

道理でしょう。しかし、私たち念仏者には、他力の因果の道理があります。ともに同じ南無阿弥陀仏をいただくから、同じ浄土で会えるのです。先立つ人と、あとに残る者とができ、愛しい人とも別れていかねばならない「愛別離苦」の世界に住む私たちに、また会うことのできる世界、浄土を建立くださったのが、阿弥陀如来の慈悲のはたらきです。

まずは、このように結果を示し、その結果を得るには、「少善根福德の因縁をもつてかの国に生ずることを得べからず」と、往生の因行についての説法へと展開してまいります。

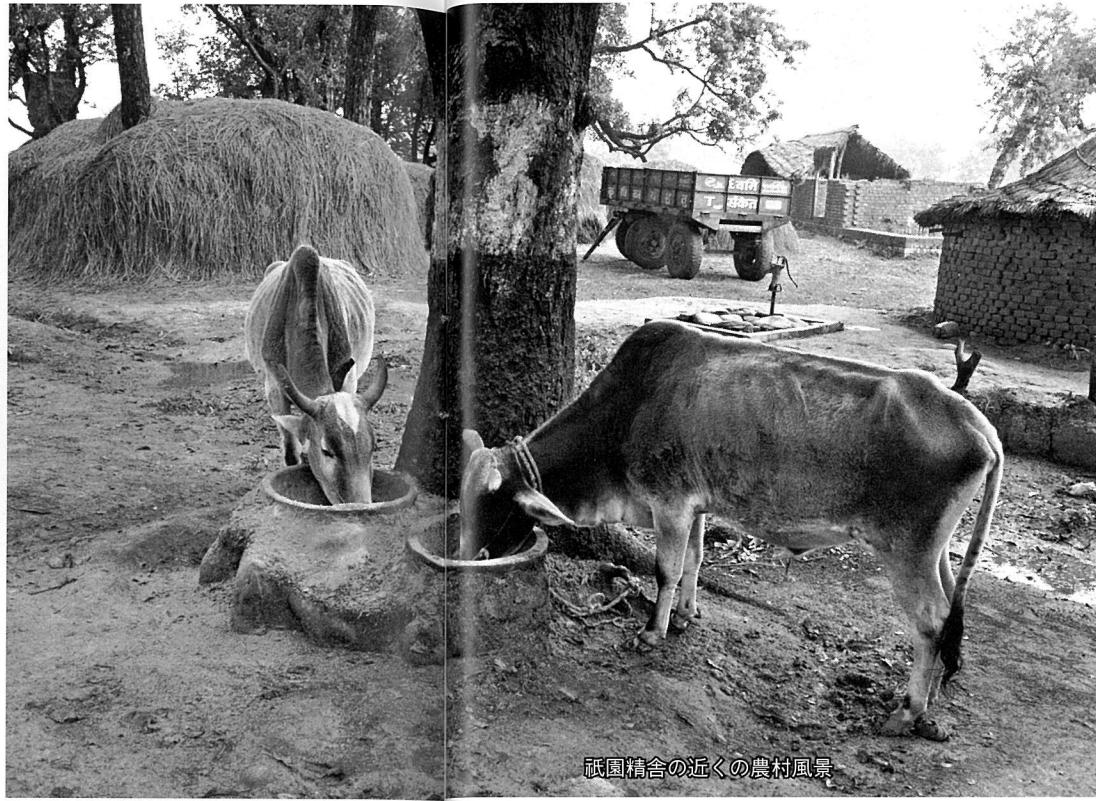
舍利弗よ、もし善良なものが、阿弥陀仏の名号を聞き、その名号を心にとどめ、あるいは一日、あるいは二日、あるいは三日、あるいは四日、あるいは五日、あるいは六日、あるいは七日の間、一心に思いを乱さないなら、その人が命を終えようとするときに、阿弥陀仏が多くの聖者たちとともにその前に現れてくださるのである。そこでその人がいよいよ命を終えるとき、心が乱れ惑うことなく、ただちに阿弥陀仏の極楽世界に生れることができる。

舍利弗よ、わたしはこのような利益があることをよく知っているから、このことを説くのである。もし人々がこの教えを聞いたなら、ぜひともその国に生れたいと願うがよい。

■修因段―『阿弥陀経』最大の難所

この一段を特に「修因段」とも称することがあります。浄土往生の因行について説かれる大切なところであり、同時に、『阿弥陀経』の中で最大の難所と言えるかも知れません。大切なところとしての意義について言えば、例えば善導大師が、撰論家の人たちによる「念仏往生」の否定に対して、「念仏往生」の根拠とされた文の一つが、この一段でした。

いまずでこの聖教ありてもつて明証となす。いぶかし、今時の一切の行者、知らずなんの意ぞ、凡小の論に



祇園精舎の近くの農村風景

するにあたっては、「少善根」・「多善根」の語が、対概念としてわかりやすいと考えられたのでしよう。しかし、これに続けて、「ただ多少の義あるのみにあらず。また大小の義あり。(中略)また勝劣の義あり」と述べておられます。単純に多少の論理だけではないと注意されており、親鸞聖人が、いまの襄陽石刻の『阿弥陀経』の文について「化身土文類」に、『経』には「多善根・多功德・多福徳因縁」と説き、(中略)これはこれ、この『経』の顕の義を示すなり(三九七頁)として、「顕の義」すなわち、第二十願の自力念仏の文とされていることと関係するよう思われます。

この「多少」の論理が、念仏そのものに向かった途端に、数多く称えた念仏が多功德であり、数の少ない念仏は少功德であるという、自力念仏の論理へと転落します。法然聖人が、すでに一念をもつて一無上となす。まさに知るべし、十

すなはち信受を加へ、諸仏の誠言を返りてまさに妄語せんとする。(中略)むしろ今世の錯りを傷りて仏語を信ぜよ

(七祖三三三頁)

と述べ、念仏往生の道理は經典に書かれている「仏語」であつて、『論』の勝手な解釈によつて、これを否定する余地などない、との論理で明確に反論されたのです。

法然聖人も、善導大師の義を承けられ、『選択集』に、『阿弥陀経』のなかのごときは、一日七日もつばら弥陀の名号を念じて生ずることを得と。(中略)念仏はこれ本願の行なり。諸行はこれ本願にあらず

(七祖二二〇頁)

として、善導大師と同じく、今の文を根拠に、念仏を本願の行とされています。『選択集』ではさらに、「雑善はこれ少善根なり。念仏はこれ多善根なり」(七祖二七五頁)の論理を、次の文を根拠にして述べられます。

襄陽の石に『阿弥陀経』を刻れり。(中略)「一心不乱」より下に、(専持名号以称名故諸罪消滅即是多善根福德因縁)といふ

(同頁)

と、特に襄陽石刻の『阿弥陀経』を挙げています。前節にあつた「少善根」とは諸行のことで、これに対し、念仏が「多善根」であることを証明されています。「諸行」と「念仏」とを対比

念をもつて十無上となし、また百念をもつて百無上となし、

(七祖二三四頁)

と示されるように、他力の念仏は、数の多少によつて功德が変化することはなく、「一念」の功德も「無上」であり、「十念」の功德も「無上」です。数式では、「 ∞ (無限大)」には何を掛けても答えは「 ∞ 」です。他力の念仏は、相対自力の次元を超えた、絶対無上の次元なのです。だから親鸞聖人は、敢えて「多善根」の語が見られる襄陽石刻の文を、「顕説」の文例に挙げるのです。

■『阿弥陀経』の真意

「隠顕釈」は、親鸞聖人独自の「浄土三部経」の見方です。表に顕れている義と、裏に隠れている義との両面の視点で、經典の真意を見定めるといふ手法です。

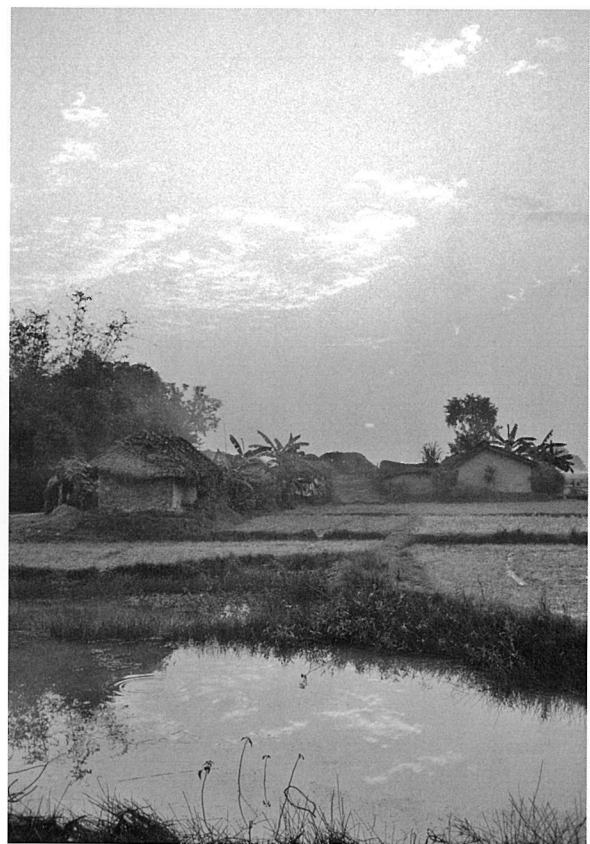
第十八願・第十九願・第二十願の生因の三願を、「浄土三部経」それぞれに配当するという、独特の經典観を施されました。第十八願は他力弘願の念仏で、『大経』によつて説かれています。第十九願は、諸行という自力を募るあり方で、「浄土三部経」では『観経』が、經典の表向きでは定散二善の自力の観法が説かれているため、第十九願の内容を表しているように見

ことができます。第二十願は、第十九願の「諸行」に対して「念仏一行」に立ちますが、その「念仏」が、自力の念仏となっているのです。数多く称えた方が功德が多いとか、精神を集中して称えなければならぬとか、衆生の側の自力を必要とする念仏が第二十願であり、『阿弥陀経』には、特にこの「修因段」において、第二十願の内容が見られるのです。

具体的に言えば、「もしは一日、もしは二日、(中略)もしは七日」として称える念仏が、表面的には、「一日〓七日」として期間を定めて称える「別時念仏」の形になっています。七日連続して称える念仏行法、「百万遍念仏」とも言われますが、これが「別時念仏」で、基本的には数多く念仏を称えることを求める自力の念仏と言えるでしょう。

また「一心にして乱れざれば」が、精神を定心に統一して、乱れ心をなくして念仏を称えるということであれば、これも表面的には、凡夫不堪の自力念仏と言えます。さらには、「その人、命終の時に臨みて、阿弥陀仏、もろもろの聖衆と現じてその前にまします」という「臨終来迎」も、第十八願の法義とは異なるように見えます。

これらのことから、『阿弥陀経』は、表面的には、まさしき他力弘願の法義ではなく、自力の念仏が見られる経典というこ



とだとわかります。

臨終来迎についても、親鸞聖人は、『一念多念文意』で、「一切臨終時」とは、極楽をねがうよろづの衆生、いのちはらんとときまでといふことばなり(六七七頁)と釈され、臨終の一瞬に限定した来迎ではなく、「いのちをはらんとときまで」として、平生聞信の一念から命終の時に臨むまでのすべての時間についての撰取不捨の仏意で読み取っておられ、弘願の法義を窺い知ることができます。

このように、『阿弥陀経』には、「隠顕」のかかるところがあ

とになり、これが「顕説」での見方です。

「浄土三部経」を、表に顕れている相違点で見れば、右のように「三経差別」の見方となりますが、他面、裏に隠れている深意で読み取れば、実は、三経ともに第十八願の法義であると見るのが「三経一致」の見方で、親鸞聖人は、この両様の見方をされています。

先ほどの「自力」に見える部分について、裏にはどう「他力」の法義が窺われるかを実際に考えてみましょう。

「一日乃至七日」の「別時念仏」であれば明らかに自力の念仏となりますが、『阿弥陀経』では、「もしは」という「若」の字がついており、これは「限定しない」という意を表します。つまり「一日たりとも欠けてはならない」という「別時念仏」ではなく、「あるいは一日でも、あるいは七日でも」といった一多不定の相続行と見ることが出来ます。一多不定とは、数の多少を問題としないということですから、称えることに自分の手柄はない他力の念仏とうかがえます。

次に「一心不乱」について、親鸞聖人は、「化身土文類」のなかで、「(一)の言は無二に名づくるの言なり。(心)の言は真実に名づくるなり(三九八頁)との語釈をされておられ、「定心の念仏」ではなく、弥陀一仏への帰依を表す「無二心」のこ

り、特にこの「修因段」に集中しています。大切な名所であると同時に、自力の落し穴が多い難所でもあるのです。

ちなみに、『観経』・『阿弥陀経』には、今のように「隠顕」がありますが、『大経』には、「隠顕」はありません。真実は真実として、方便は方便として、きちつと仕分けされて説かれているのが『大経』です。

■ 釈尊の証明

この後、釈尊は、「われこの利を見るがゆゑに、この言を説く」との釈尊自身による力強い証明の言葉が述べられます。疑い深い私たち凡夫です。お伽話ではないか。架空の話ではないか。ついつい疑い心が顔を出します。そんな私たちの心を見透かすかのように、「私は、実際に、阿弥陀仏の利益を見た」と証言してくださっているのです。

学習のポイント

- (1) 親鸞聖人は「往生即成仏」の教えを示されましたが、浄土の菩薩をどのように考えられたでしょうか。
- (2) 親鸞聖人の隠顕の見方によって、因果段の文の意味を考えてみましょう。